

図書館だより  
Library News No.60  
Nara National College of Technology

2004年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙絵 4I 市川 まどかさん

目 次

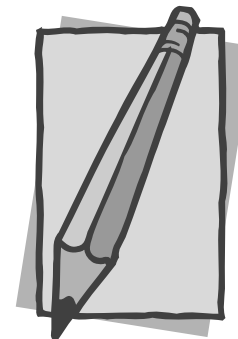
巻頭言「文章で真実を伝える」…………… 2	読書感想文コンクールについて …………… 5
特別寄稿 「コミュニケーション—話すということ」 …… 3	入賞作品紹介 …………… 7
新任教官から一言 ぶらりぶらぶら図書館へ …………… 4	

学生諸君は日頃、実験レポート、課題報告書、読書感想文等文章を書く機会が多いと思う。私も教官の一人としてレポートの採点等で文章を読む機会が多いし、報告書や提出書類等書く機会も多い。昨年私は、異分野の人に文章で報告し理解していただく仕事を経験した。近年環境破壊が心配される状況の中、研究機関や企業でも環境に関する取組を進めているところは多い。また、最近の起業ブームで、特に環境に関する仕事には国等からの補助金もありベンチャー企業の増加や、新規参入企業も多く見受けられる。しかしすべてが必ずしも順風満帆の会社経営が出来るものではない。

私も数年前から環境に関わる仕事を始めた関係で、企業の方との協同研究の申し入れも増え、一緒に仕事をしているが問題解決の難しさを痛感している。そんな折り突然地方裁判所の書記官から、民事裁判の鑑定人依頼の電話を受けた。国民の利益につながる仕事と言うことで、引き受けたが初体験でありとまどう事も多くあった。新規に建設した環境関連のプラントであるがうまく製品が作れない。本当にこの原料から製品が作れるのかまたこの装置で大丈夫なのか。地元の反対で数億円のプラントを取り壊すことになってしまったという損害賠償裁判であった。通常は、本装置の建設前にパイロットプラント等で検証実験を行うのが常であるが、どうしてこのようになったか理解できない部分がある。計画段階の安易な判断が原因と思われるが、結果は最悪の事態となったようである。

原告、被告両弁護士及び裁判官との会議を終え、鑑定を行うこととなった。通常読み慣れている工学書と異なり、陳述書、設備建築請負書、契約書、地元説明会資料、口頭弁論準備書、事業計画書、プラント納入仕様書等々数百頁に及ぶ文章・図面であった。理解するのに数ヶ月を要した。またプラント仕様書からの装置性能の判断や原料分析については、とうてい1人では判断・解析できるものではなく多くの協力者に助言を求めた。鑑定書の作成には、公文書独特の書き方があり（本校でも学生諸君は国語の時間に一部の公文書の書き方を習ったと思うが）これも良い経験になった。一番困ったことは、専門用語を用いて鑑定書を作成するのであるが（出来るだけ平易に、理解していただけるように心がけたが）弁護士及び裁判官に理解してもらえるであろうかとの不安であった。

現在まだ裁判続行中であるので内容については触れられないが、作成した文章が証拠として採用される重大さを考えると、文章表現の1字1句に慎重さが要求される。書き終えて表現法の難しさ、また自身の表現力の乏しさを感じた年末であった。



## コミュニケーション

### —話すということ—

庶務課長 織田 辰男

それは何とも不思議で、それでいて身体の芯から感動を覚えるような光景だった。人は時々何気ない日常生活の中で、ふと色々な想いに巡り会うことがある。他人は何も感じないたわいもないことに、妙に感情が揺り動かされたりする。今でも私の脳裏に鮮明に記憶されている、「その時」の光景をお話しさせていただこう。

今から5、6年くらい前の話になるが、その頃、私は東京・上野の国立西洋美術館に勤務していた。宮崎に出張するために羽田空港に向かっていたのだが、急な来客との打ち合わせに時間を取られ、浜松町で閉じかけたドアをこじ開けるようにモノレールに乗り込んだ時には、搭乗便の出発時刻まで30分あるかないかの正しく滑り込みセーフの時間となっていた。ギリギリに飛び乗ったモノレールの中は、当然座る席もなく、荷物置き場に背を持たれ、全力疾走で乱れた息を整えながら、ぼんやりと窓の外を眺めていると、ふと離れた場所に座った4人組の動きが目に飛び込んできた。私の方から顔が見える位置に座っているのは年の頃なら30歳前後の男性と同じ歳くらいの女性、頭しか見えない位置には少し年配の女性が二人、別に何の不思議もないグループなのだが、私が気を奪われたのはこのグループが手話で会話していたからである。恐らく、このグループの全員、あるいは何人かが手話を必要とされる方なのであろう。このような時に、そちらの方向をジロジロ眺めるのは大変失礼なことであるが、手話で話している方々の顔が非常に楽しそうに映り、相手に気持ちを一生懸命に伝えようと忙しく手を動かし、また相手の気持ちを少しでも理解しようと一挙手一投足に至るまで見逃すまいと神経を集中させている姿に魅せられて、ついつい眺め続けてしまったのである。当時、私は単身赴任中であり（現在もであるが）、家族へは週に1、2回電話をする程度、帰省も平均すると月に1回程度という生活を送っていた。つまり、私はコミュニケーションのための最も有効な手段である「ことば」を喋れるにもかかわらず、仕事にかまけて家族との会話をおろそかにしていたのである。ところがどうだ。目の前にいるこの人たちは、「ことば」を失ったにもかかわらず、一生懸命会話しているのである。時には笑い、時には頷き、時には驚き、話し声こそ聞こえてこないものの本当に楽しそうに会話しているのである。

もし、私が同じように相手にもっと理解してもらおうと一生懸命喋り、相手の話をもっと理解しようと一生懸命耳を傾ける努力をすれば、家族のことも、友人のことも、もっともっと理解することが出来るし、素晴らしい人間関係が築けることになるはずだ。人は時に、当たり前ことに慣れてしまい、そのありがたさを忘れてしまうものようだ。その当たり前が当たり前で無くなった時に、当たりのありがたさを実感するのである。

隣の男性の手話に頷いていた女性が、こちらに視線を投げかけてきたので私と目と目が合ってしまった。慌てて視線を逸らせたが、女性は何事もなかったかのように会話に戻っていった。その楽しい姿をぼんやり眺めながら、心が豊かになっていくのを感じずにはいられなかった。

## 新任教官から一言

### ぶらりぶらぶら図書館へ

一般教科 長瀬 潤

先日、15年ぶりにインフルエンザにかかり、39度を超える熱の苦しさと、関節の痛みを久しぶりに味わいました。ぐたぐたに汗をかいては、水分補給をして、また汗をかいては…起き上がるのもつらいのに、寝間着を何度も着替えるので大変でした。もう、二度とかかりたくない思いですが、小、中学生の頃は、そんなインフルエンザに何度もかかっていました。今、思うとよく耐えられたものだと、その頃の自分に少し感心します。しかし、高校時代はインフルエンザとは全く無縁でした。ひどい風邪もほとんどなく、健康的な生活を送っていました。毎年、時期が来ると、文化祭だ運動会だと行事にいそしんで、あちらこちらの部室を渡り歩き、勉強は好きな科目はとことんやるけど、苦手な科目はほどほどで。今、思い出すと、好きな所で、好きなように高校生活を送っていたので、試験以外に大きなストレスが無く、ひどい風邪をひくことも無かったのかも知れません。

学生みなさんは、今、大きなストレスを感じることがありますか。学校内で、自分の好きな場所がありますか。僕は、試験が終わると、友達の部室や教室をのぞいたり、職員室（研究室）訪問したり、図書館でこもってみたりするのが好きでした。何箇所も楽しめる場所があると、そのときの気分に合う場所が見つかるもので、高校時代の大半をぶらりぶらぶらと渡り歩いて過ごしていたように思います。そんな中でも、特にお世話になったのが図書館でした。本を読むのはあまり得意ではないのですが、わからないことをインターネットで検索できる時代ではなかったもので、調べものがあるときは図書館へ行くのです。そして、調べものが終わると、あちらの棚へ、こちらの棚へとぶらぶらして、魅力的な背表紙を見つけては、中身をちらりと拝見して時間をつぶしていました。前書きしか読んでないのに、夢中になって下校時間まで残っていることもたびたびありました。頭にはたいして何も残っていなかったりするのですが、満足感と新たな知的好奇心を十分に得られる場所だったことは、今でもはっきりと覚えています。

本を読むのが苦手な人でも図書館は楽しめるし、勉強が苦手な人でも研究室訪問は楽しめます。クラブに入っていない人でも友達のクラブの様子を見に行くことは楽しいです。学生時代だからできる一つの過ごし方だと思います。学生みなさん、学校の中に、自分が楽しめる、好きになれる場所を探して、ぶらりぶらぶら渡り歩いてみるのはいかがでしょうか。

### 多読表彰について

4月から12月までの貸出冊数の統計結果に基づき、本年度の多読表彰は1位・4M、2位・1S、3位・機械制御専攻2年、4位・5M、5位・化学専攻2年が受賞することになりました。各クラス代表は1月8日（木）校長室にて表彰状、並びに副賞の希望図書購入権を授与されました。因みに第1位の4Mは1人当たり平均35.5冊です。年間ゼロという人も含めての平均35.5冊という貸出冊数はすごいですね。まもなく希望図書が、新刊書棚に並ぶことと思います。お楽しみに。

平成15年度

## 読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

図書館委員会主催・第28回読書感想文コンクールの結果を発表します。応募総数は385編。その中から、図書館委員会と国語科、計11名による投票・審査の結果、次の最優秀作1編と優秀作9編が入選となりました。以下に、その氏名を記し、その榮譽をたたえたいと思います。

### 最優秀賞

情報工学科3年 田中 健太郎 『ラフカディオ・ハーン 日本のところを描く』を読んで

### 優秀賞

機械工学科4年 森口 遼太 『約束された場所で』の感想  
機械工学科2年 仲井 智彦 『変身』を読んで  
電気工学科2年 諏訪 勝重 『門』を読んで  
情報工学科2年 久保 智子 『海と毒薬』を読んで  
情報工学科2年 福井 梨恵 『自殺って言えなかった。』を読んで  
物質化学工学科2年 越田 高史 『ラフカジオ・ヘルン』について  
機械工学科1年 小早川 弘志 『二重らせん』を読んで  
機械工学科1年 藤江 勇太 『大地の子』感想文  
物質化学工学科1年 吉本 咲香 『ひつじが丘』を読んで

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で高い評価を受けて佳作とされたものは、以下の諸君の作品です。これらの諸君にも賞賛の辞を呈したいと思います。

3 E 神社 生朗	3 I 高田 篤史	3 C 丸田 寛子	2 M 仲野 正人
2 M 安村 将臣	2 E 武田 晃一	2 E 福島 悠吾	2 S 上山 大輔
2 S 佐藤 峻	2 I 衛藤 聖	2 I 原田 和幸	2 I 水野 勇貴
2 C 奥田 知生	2 C 長谷川 健	2 C 古川亜希奈	2 C 松本 佑一
1 M 川西 真史	1 E 上谷 佑介	1 E 堀 威士	1 S 辻井ありさ
1 S 西窪 義博	1 S 松井 秀樹	1 I 奥村 哲郎	1 I 河合 誠
1 I 前川 将	1 C 吉満 祥子	1 C 安田菜都希	1 C 渡邊 祥平

その他にも、力作が多くありました。応募した諸君には、この場を借りて感謝の意を表します。

以下、恒例にしたがい、入選作について、審査に携わった者の一人としてコメントを付します。

まず、最優秀作となった田中健太郎君の作品、ポイント制で、11名の教官から19ポイントという圧倒的な支持を得ました。選んだ本、その内容への理解度、それに対する感想、簡潔で明快な文章と、そのまとまり具合、全てについて最優秀作として選ばれるのに不足のない出来ばえだと思います。田中君は昨年度も「英霊の声～奈良県戦没者遺稿集」の感想文で入選していますが、恐らく田中君の内面には「日本」という一貫したテーマがあるのでしょうか。それへの真摯なアプローチが、このような立派な感想文に結実したのだと思います。今、あらためて昨年度の入選作と読み比べていますが、や

はり、この一年間で田中君の大きいに成長していることがうかがえ、一教師として嬉しく感じました。

優秀作となった作品中、最も高い評価を得たのは森口遼太君の作品でした。人間観察の深まり具合はさすが4年生と思わせ、また文章は、豊富な語彙を自在に操り、きびきびとした論理が展開されているもので、そこから森口君の頭脳の明敏さが感じとられます。個人的には、田中君の作品に代わって、こちらが最優秀作とされてもよかったのではないかと感じています。ただ、書き出しの所で、少し余計な感のあることが書かれているのが、審査ではマイナスに作用したのかとも思います。

今回のコンクールの結果の特徴の一つは、いわゆる「名作」とされる小説の感想文の入選作が多かったことで、諏訪勝重君、久保智子さん、仲井智彦君の作品がそれに当たります。夏目漱石『門』、遠藤周作『海と毒草』、F・カフカ『変身』、全て重いテーマを扱った作品ですが、このような作品の感想文は、その重いテーマにどこまで肉薄できるかにかかっていると思います。機会があったら、数年後、もう一度同じ小説を読んでみて下さい。きっと今回見えなかったものが見えると思います。それが人間として成長するということであり、そのような読み方ができるからこそ、それらの作品は「名作」と言われているのです。

福井梨恵さんの作品は、文章の上手さ、まとまりの良さでは最高クラスの出来だと思います。ただ、最優秀賞となった昨年度の作品に対して、今年度は、更に一段の成長ぶりを見せてほしかったというのは無理な望みでしょうか？

越田高史君の作品は、最優秀賞となった田中君と同じ人物を扱っていますが、ハーンの人生について採りあげるべき点はきちんと採りあげており、これはこれで中々の出来のものと言えらると思います。

藤江勇太君の作品は、ベスト・セラーとなった問題作を選び、それについての藤江君の考えが、非常に文章力があると思わせる文章で書かれています。ただ、文章力にまかせて、書き流しているような印象が感じられました。もう少し時間をかけて、じっくりと練って書いていたら、最優秀賞クラスの感想文になっていたのではないかと思います。藤江君はまだ1年生、来年度の藤江君の作品を期待します。

小早川弘志君の作品は、「理数系っぽい」本を選んだ所がポイントだったと思います。今年度は、この類の本を選んだ感想文が少なかったようですが、小説やエッセイだけが読書感想文の対象になるわけではないといういい見本になると思います。

最後に、吉本咲香さんの作品は、無理のない素直な文章で素直な感想が書かれており、その点で好感の持てる感想文に仕上がっています。次の機会があったら、その時にはもっと本格的な「名作」と言われる作品に挑戦して下さい。

(国語科・勢田)



受賞された皆さん（校長室にて）

## 入賞作品紹介

河島弘美著

### 『ラフカディオ・ハーン 日本のこころを描く』を読んで

3 E 田中 健太郎

日本の象徴でもある富士山。この山を初めてみたとき、僕は、「大きいな」「凄いな」と、ただただ単純に感動したのを覚えています。しかし、同じ富士山を見ても、もっと違った目で富士山を見た人物がいました。その人物は富士山を見たときのことを、こう綴っています。「力強い山頂が、いま明けなるとする日の光の赤らみの中で、まるで不可思議な夢幻の蓮の花の蕾のように、紅に染まっているのが見えた。」僕はこれを読んだとき、とても美しい描写だと思いました。ただ単純に感動したというのではなく、富士山というものの神秘的な美しさを読み手に見事に伝えてくれます。

そして驚いたのは、このような美しい描写で富士山を描いた人物が日本人ではなく、なんと外国の人だったということです。その人物の名前は、ラフカディオ・ハーン。日本の怪談話を書いた、あの小泉八雲なのです。僕はラフカディオ・ハーン作品は怪談しか知りませんでした。そんな彼が実は多くの紀行文やエッセイを書いていることを、『ラフカディオ・ハーン 日本の心を描く』という本で僕は初めて知りました。そしてこの本の中に引用されている彼の紀行文に初めて接し、その描写の美しさと、日本というものを見た目だけでなく、その本質をまで描いている文章にとっても感動しました。

ハーンはもともとヨーロッパ生まれでした。若い頃にアメリカに渡り、新聞記者などを経た後、日本に興味を持ち、四十才になる少し前に来日したそうです。彼が来日したのは、一八九〇年、明治二十三年のことです。明治になって一気に文明化したといっても、まだまだ明治時代の日本の文明の発展は遅く、ほとんどのヨーロッパ・アメリカ人は、その頃日本に対して否定的な見方をしていました。

しかし、ラフカディオ・ハーンは、それまでの外国人とは違う目で日本を見ました。その文化の根本

にある、古来からの「日本のこころ」というものを、ハーンはしっかりとその優れた感性で捉えたのです。ですから、ハーンが描く日本は、それまでの外国人が日本を描いたものとは大きく違いました。

たとえば、ハーンより先に日本に来ていたチェンバレンが日本の音楽をけなし、あんなものを音楽と呼べないと言っているのに対し、ハーンは、「日本古来の音楽には、独特の美しい魅力がある」と書き、「日本の音楽の調べは優美で快く、微妙な芸術的雰囲気は確かに存在します」と言っています。

そしてまた、西洋人にとって不可解とされる日本人の微笑についても、「周囲の人々に気持ちの良い印象を与えるように努めるのが日本人の礼儀作法である。したがって、日本人の微笑はつくり笑い、冷笑、嘲笑とは違うのだ」と言っています。日本人の微笑は、日本民族が長年つちかってきた道徳観の表れだというのがハーンの考察だったようです。

このように、ハーンは文明の進んだ国からやってきた西洋人として一段高いところから日本や日本人を見るのではなく、先入観なく、日本を蔑視することもなく、日本人と同じ目線に立って日本を観察し、相手への共感を持って日本人と接したのです。

僕はこれらのハーンの紀行文やエッセイを読むうち、僕たち日本人でさえ気付いていない日本の良さ、そして日本人の良さを教えられたような気持ちになりました。百年以上も前に、西洋人であるハーンが感じ取った「日本のこころ」、その素晴らしさを、僕を含めた現代の日本人は忘れてるように思います。

たとえば、今もよく日本人は外国人に比べ「個性がない」と言われます。それはいつも日本人の欠点として言われていることです。明治時代もすでに日本人の非個人性は批判されていました。でもハーンはその日本人の弱点とされる個性の欠如にこそ、日本人の性格のもっとも魅力的で重要な点が現れているのだと言っているのです。

西洋での個性や個人性の発達は利己的、攻撃的な色彩を帯び、むしろ不幸を呼んでいるが、日本の個

性の欠如は自発的で、義務のための自己犠牲という日本古来の道徳と重なり、日本人の微笑は、自己抑制から生まれる幸福を象徴しているとハーンは分析したのです。

僕はこれを読んで、今まで欠点だと思っていたものが、日本人の美点だと言われる新鮮さにハッとしました。と、同時に、今の日本人は彼が褒め称えた日本人の良さを失っていることにも気付きました。

利己主義に走り、自分さえ良ければ他人など関係ないという人間や、他人の痛みは無頓着になり、まるでゲームのように万引きや引ったくりを繰り返す若者が増えてきた日本。

そこにはハーンが見た、謙虚で優しく思いやりのある、そして自分以外の人の幸福のために自分を抑え忍耐する、美しい「日本のこころ」を見ることは出来ません。

かつてハーンが、「幸せに生きる秘訣が、日本ほど広く国民の間に理解されているような文明国はほかにない」と言った言葉は、もう今の日本には当てはまらないのです。

でもそのことを嘆いたり、古き良き昔を偲ぶだけではいけないと思います。

今一度、僕達は自分とその周りの人達を見つめなおし、自分のためだけでなく、人のためにも心を砕いたり、行動できる、「日本人の心」を育てなければならぬと思います。



村上春樹著

### 『約束された場所で』の感想

4M 森口 遼太

村上春樹の本を何か読みたかったのだけど小説はあらかた読んでしまったので、ひとつ評論を読んでみようと思いこの本を手にとった。この本はオウム

真理教について、「マスメディアを通じた二次的な情報でなく読者が明確な視座を作り出すのに必要な一次的材料を提供するため」に書かれた。内容は大きく分けてオウムの(元)信者へのインタビューと、著者と心理セラピストの河合隼雄氏との対談で構成されている。最初は感想文なんて書くつもりはなかったけど、読み終えてから、自分の考えを文章化することによって整理したいと思いこの感想文を書くことにした。

以前から僕の中には、「なぜ多くの人々（特に僕を含む若い人々）が新興宗教やニューエイジ的な幻想に強く魅かれるのだろうか？」という疑問があった。でもこの本のインタビュー、つまりオウム(元)信者たちの話を読むと、その答えがおぼろげにはあるが見えてきた。まず彼らは往々にして論理的な人間である。論理が通らないと納得しないが、論理が通るものは積極的に受け入れようとする。また彼らの多くはインタビューの中で「入信前自分は、この社会での物質的な成功よりも精神的な達成を目指していた。」と異口同音に語っている。つまり彼らは不条理なことだらけの現実世界よりも、オウムが提示したシンプルで論理的な精神世界に魅せられ、その世界に入り込んでいったのではないか。

河合氏との対談の中で著者は、麻原の作り出したこのような世界観を「広がりがなく、奇妙に単一で平板」、つまり構造が単純明快で、矛盾や悪を内包することを認めない世界であると述べている。最初は純粹であったはずのオウム世界は、その純粹さに魅かれて人々が集まり、教団が大きくなるにしたがって新たに内部に発生した悪・矛盾を取り繕うために、その姿をいびつなものに変えていった。それ自身に悪を内包することを拒む世界は、内部の純粹さを保つために外部（すなわち僕たちが住むこの社会）に悪を置くしかなく、その結果として外部に「攻撃」を行うしかなかったのだ。マツモトチズラが作り出したはずの物語が、逆にアサハラショウコウという危険な人物を作り上げていったのだ。

最近オウム関連のニュースはめっきり見かけなくなったが、地下鉄サリン事件が起こった当時ワイドショーで盛んに騒がれていたのは、オウム教義の不気味な側面や、信者の家庭環境などであったが、そんなことは全然、まったく、本質的な問題でないと



今になって思う。問題なのは「現代の日本における有効なサブ・システムの不在」であると著者は書いている。社会（メイン・システム）での物質的生活を拒む人々を受け入れる健全かつ有効なサブ・システムが今の日本には存在しないのだ。その結果それらの人々はオウム真理教のような危険性を含んだシステムに流れていかざるを得ない。

この本を読み終えてから僕は、よく「悪」について考える。地下鉄で毒物を撒いて無差別に人々を傷つける行為、これは悪だ。それも行為者によって正義にもなりうるような相対的な悪ではなく、普遍的共時的に存在する絶対悪だ。断言できる。しかし、人が精神的達成を求める宗教的希求行為、これは現代のように物質的快楽と閉塞感に満ち溢れた社会においては寧ろ健全なことであると思う。ではどの過程であるような巨大な悪が発生したのだろうか？オウム教義がもともと悪の因子を含んだものだったのか、松本智津夫それ自身が悪だったのか、それともオウムのシステムが悪を作り出したのか。わからない。まだ自分の中で明確な答えは出ていない。ただひとつ言えることは、このタイプの悪の発生のメカニズムは依然として日本に存在しているということだ。同様の悪が発生する危険性は十分にある。

『もしかすると世界の仕組みそのものが悪の発生と収束の上に成り立っているのかもしれない。』

そんなことを少し考えた。

カフカ著

## 『変身』を読んで

2M 仲井 智彦

国語の授業のときに読んだ『山月記』と基本的には同様の話となっはいるが、主人公はもちろん、その周囲の人々の心情と行動もが細かく多彩に表されており、予想以上に楽しむことができた。

朝早く仕事に出かけるはずだったグレゴール・ザムザは、自分の体が寝床の中で巨大な褐色の虫と化していることに気づく。とんでもないことが起こったものだと思いつつ仕事のことなどを考えていると、彼の出勤時刻が過ぎてしまっていることを不思議に思った両親と勤め先の支配人までもが彼の部屋の前にやってきてしまう。

グレゴールの職業は外交販売員である。しかし、この仕事は両親が社長への借金返済を目的に無理やりやらせているようなもので、彼自身、実に辛気くさい仕事だと思っている。とはいえ五年もそれを続けてきたので優に一家を支えるだけ稼ぎはしており、冬には大の音楽好きの妹を音楽学校へ入れてやろうと計画していたほどだ。

グレゴールは人間の感情こそ残ってはいたが、体は虫そのものである。しかも「話す」ことができなくなっていたので両親の問いかけにも答えることができず、そのため彼は自分で部屋のドアを空けて事態を見た目で理解させるしかなかった。だが、やっとの思いでドアを開けた彼を待っていたのは絶望でしかなかった。彼の姿を見たたん、支配人は飛ぶように逃げ出し、母親は錯乱して叫びだし、父親は彼を無理やりもとの部屋へ追い戻そうとしたのである。

それから彼の監禁生活が始まった。妹が食事の差し出しと掃除をしにくる以外は、ドアに鍵をかけて誰も部屋の中に入ろうとはしなかった。他の家の者の生活も大きく変わった。何しろグレゴールという唯一の稼ぎ手が事実上いなくなってしまったので、彼の稼ぎにすがってきた自分達が働いて生計を立てていくしか術はなかった。

監禁下のグレゴールにとって趣といえば虫の体を使って天井を這いまわるぐらいであったが、これが事件を招くことになる。ある日、気をきかした妹が部屋から邪魔な家具を運び出していると、手伝いをしていた母親がグレゴールの姿を見て気絶してしまうのである。そこへ父親が林檎を投げつけてきて、再び彼を追いたて始めたのである。この林檎爆撃が彼に致命傷を与えることとなった。

それからというもの、彼は心も体も衰弱していき、家族の彼に対する態度も冷えていった。そして春が近づいてきた頃、グレゴールは永遠に沈黙することになる。だが、その代償として、それまで自由奔放な暮らしをしていた妹は自立した一人の女に成長しており、その姿は両親にとって新しい夢と生きる力のように映ったのである。

僕もグレゴールのような目にあったらどうなるだろうかと思いつつ読み上げたが、非常に不思議な印象を持たずにはいられなかった。なぜならグレゴ

ルは変身した理由について何一つ考えていないからである。『山月記』の場合、主人公はその性格の醜さが自分を変身させたのだと結論づけているが、グレゴールはそのようなことはせず、それどころか変身したことをさもあたり前のようにはうけとめる冷静ささえ見せている。これは他の家の者にも言えることである。一体なぜであろう。彼が人づき合いの薄い外交販売員だったからか、それともあまりにも家族が彼に頼りきっていたからであろうか。

だが、その理由がいかなるものであるにせよ、ただ一つ確実に言えることは、グレゴールはまだ幸せな方であったと思う。彼の死により、残された者達は生きる力と術を見いだすことができたのだから。

そういう意味合いからグレゴールの虫の体が象徴する姿は、身近なもので言うならば「年老いた親」にあたるのではないかと思う。

夏目漱石著

## 『門』を読んで

2 E 諏訪 勝重

主人公「宗助」とその妻「御米」は自分達が過去に犯した失敗、すなわち不倫の恋によっていつまでも悩み苦しみます。彼らは貧しく子供にも恵まれませんでした。しかし彼らはお互いを常に必要としていました。僕はこの二人が共にいる限り何事にも耐えていけるような気がしました。お金だけでは幸せを手に入れる事はできないとよく耳にします。この二人は生活の中から小さな幸福を見出すことで、まさにその部分に関して不足がないように思えたのです。

宗助は京大を中退しましたが、友人であり御米の元夫である安井も同大学を中退し、その将来を傷つけるなど多くの人に迷惑をかけました。彼らの失敗は若さ故に一時の情に流された事です。これは、確かに社会上モラルの欠けた軽佻な行為だと思います。しかし、宗助は本当にこれほどまで悩み苦しみながら生きなければならないのでしょうか？彼は病弱だった安井が大学を中退し、今では蒙古へ渡るなど破滅の人生を歩んでいるように感じています。また家主の坂井については生活に余裕があり、陽気で子宝にも恵まれ何の悩みもない成功した人生のように

考えています。彼は他人の人生をこれ程冷静に見つめながらも自分の過去からは抜け出せずにいます。彼は過去の失敗をいつまでも悔いていますが、もしその後中退せずに大学を卒業したとしても、一生反りの合わない妻と結婚したら？仕事で大失敗したら？…人生において、「もし」は禁物です。そう、人は誰しも人生において多くの決断を迫られる時があると思うのです。何が良く何が悪いかなんて誰にも分からない事だと思います。冒頭部分の会話で宗助は、「いくら容易い字でも、こりゃ変だと思って疑りだすと分からなくなる。」と言っています。これはまるで宗助が自分自身の人生をいくら考えてもどうしていいか分からないという事を暗示しているようにも思えました。

人目を避け、ひっそりと暮らす夫婦ですが、最も会いたくない安井が家主の家に偶然現れる事を知り、宗助は驚愕します。事情を知らない坂井に安井に会ってみてはと持ちかけられますが複雑な心境で結局会いませんでした。また御米に心配をかけたくないので誰にも話すことができず、宗助は悩み疲れ、一人十日間鎌倉の禅寺へ頭を休めに行きました。彼はこの間に懸命にこの安井の問題を解決しようと努めました。しかし彼はついに悟りをえる事ができませんでした。「彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。」とあります。宗助はこの門を通らなければならない人であり、通れない人であったのです。僕はここに運命の皮肉と言うべき恐ろしさを感じました。人は悩みから懸命に逃げようとしますが、またすぐに新たな門が自分の前に立ちはだかるのです。その繰り返しが生きている事ではないのでしょうか。こう考えてみれば今僕にとっての「門」とは何なのでしょう？それは自分の具体的な将来のために今どうすべきか？を考える事かもしれません。あるいは数学の成績不振をどう立ち直るか？かもしれません。この「門」は個々に様々な大きさがあり、宗助のように通る事のできないものもあれば、少し考え方を換えれば容易に開くものもあるでしょう。

今後僕自身の人生において、たくさんの「門」が聳え立つかもしれません。しかし、それら一つ一つを精一杯切り開いて自分の人生を着実に歩んで行きたいと思います。最後に、この本を読んで、今現在

の行い全てに大きな意味があり未来へ繋がっているのだと思うと、常に今を懸命に生きて行きたいと思いました。



遠藤周作著

## 『海と毒薬』を読んで

### 2 I 久保 智子

この小説は、実際にあった恐るべき事件を題材にしたものである。今次大戦末、九州の大学で外国人捕虜の生体解剖が行われた。戦争終結後、この実験に深く関わった人々は皆重い刑を受けることになった。この「海と毒薬」という小説には、この事件に関わった人々の心理を明らかにしようとすると同時に、日本人とはいかなる民族かという問いを私達に投げ掛けている。

始めの場面は終戦後の東京で、主人公は結核を患っている男である。この男は、東京に引っ越してきたばかりで、定期的に受けねばならない気胸という処理ができる医師を探していた。そして、勝呂という名の医師に出会った。この医師の腕は小さな診療所に似つかわしくない程のものであった。主人公の男は、この医師の経歴について調べることになる。その結果、この勝呂という医師は米兵解剖事件に関わった医局員のうちの一人だということが明らかになった。小説はこの後、勝呂を始めとして事件に関わった人間が事件の経緯や当時の心理状態について告白するといった形で進められていく。

勝呂は事件当時、大学病院で研究生として勤務していた。平凡が一番幸せだと感じる、どこにでもいるような人物であった。その頃は日々空襲で多くの人の命が失われ、人の命を救うことが目的の病院ですら命の重さが軽視されるようになっていた。人の

命よりも出世や利益追求のほうが重視される風潮の中で、医師達の責任感やそれまで持っていた倫理観が崩れていったと推測される。小説には勝呂以外にも多くの医局員が登場するが、どの人物もどこにでもいるような平凡な人間である。その普通の人間達がなぜ人を生きたま実験に使うという残虐な行為を承諾し、実際に行ったのだろうか。

日本人は一般に特定の神を信仰する習慣がない。そのことにはよい面もあるが、危険な側面もある。それは、信仰を持たないが故に物事の善悪の判断や倫理感が個人に任されており、世間の価値観や時代の変化に伴ってそれらが変わり、時には失われてしまうという点である。このことは世間が平和を重視し個人の精神を安定に保たれている時にはよいが、ひとたびその安定が失われた時には人に思わぬ行動を起こさせる。そして、日本人の信仰心のなさがもたらす危険性が顕著に現れたのがこの事件ではないだろうか。

この事件の裁判で重罪を課せられた者達は、出世を望んで人体解剖実験の中心的役割を果たすに至った教授医師、良心の呵責を感じてみたくて実験に加わった若い医師、引き受ける理由はないが断る理由も見つけられずになんとか参加してしまった勝呂のような研修医、好奇心で実験を観覧した軍人などであった。これらの人々は決して犯罪者としての特異な感情の持ち主でなく、人間なら誰もが持っているような感情を抑えることができなただけなのではないだろうか。そのような負の感情を抑制する何かとは理性、倫理感、良心などと呼ばれている精神であろう。そしてこの精神を強く支える柱が信仰心なのではないだろうか。しかし、我々日本人のように信仰心を持たない民族の場合には、理性、倫理感、良心などが曖昧で、世間の価値観に左右されやすく崩されやすい。そのことを我々は認識しておくべきではないだろうか。信仰を持たないならそれでもよい。ただ、信仰心に負けないほどの、理性や倫理感を支える強固な柱を心の中で築く努力をすべきなのではないだろうか。私はこの「海と毒薬」を読んでそのことを強く感じた。

あしなが育英会編

## 『自殺って言えなかった。』を読んで

2 I 福井 梨恵

「私はありのままの私で、小さな幸せをかみしめて生きていこう。」

これは、この本の中で辛い体験を語った自死遺児の一人、ケイコさんの言葉だ。

この本、「自殺って言えなかった。」は、自死遺児の心の叫びをまとめた本である。自殺で父を亡くした子供達、そして、夫を亡くした妻達が辛い体験談を自分の言葉で語っている。

ケイコさんは、高校1年生の時に首吊り自殺で父親を失った。前日まで何のそぶりも見せなかった父が、突然自ら命を絶ったことにショックを受けるケイコさんの家族。母が父を追って死んでしまうのではないかという不安、周囲の目が怖くて、父の死因を「自殺」であると言えない事へのやるせなさ。どうしようもない思いでいっぱいだった彼女だが、今は前向きに、強く優しい人間になろうと決意して頑張っているのだという。

彼女が何故、前向きになれたのかというと、あしなが育英会という団体から奨学金を借りることになったのがきっかけだった。あしなが育英会とは、自殺、病気、災害、犯罪被害などの交通事故以外の原因で親を亡くしたり、親が重度後遺障害のために働けない子供達に奨学金と心のケアで支援している民間非営利団体である。あしなが育英会には、奨学生達を集めて自分史を語り合ったりする「つどい」という、親を亡くした子供達同士の交流の場があり、彼女はそれに参加したのだ。

彼女は「つどい」に参加し、初めて同じ痛みを知る人達に出会い、「私はひとりじゃない」と感じたそう。そして、その場で初めて、誰にも言えなかった「自殺」という一言が言えたのである。彼女だけでなく、多くの自死遺児が「つどい」で勇気をもらっている。

私は、本屋でこの本に出会うまで、この団体の事も活動の事も知らなかった。しかし、最近では、インターネットのサイトで知り合った人達の集団自殺が話題になっているように、自殺は社会問題となっている。それだけ多くの人が悩み、苦しんでいる証拠であるわけだが、どうして周りにいる誰かがそこ

まで思いつめていることに気付いてあげられないのだろうか。

自ら命を絶つことを決意した人は、大半が何らかのサインを出しているのだという。しかし、日本人は何かと「我慢しなさい」と言ったり、「それは本人の問題だから」と突き放す傾向にある。それ故に、吐き出すことのできない苦しみや辛さを溜め込んで、とうとう自殺をしてしまうのだ。また、日本ではうつ病や心の病のイメージが悪いため、「精神病院やカウンセリングに行ったりしたら、周りがどう思うか…」という不安のために相談に行けない人も多いと思う。そんな時、近くにいる人が話を聞いてあげ、何らかの形で力になってあげる事ができれば、心はきっと軽くなり、自殺を考え直せるのではないだろうか。私もいじめられていた時、何度か自殺を考えたことがあったが、家族と友人の支えあって立ち直る事ができた。周りの人の優しさは何よりも強い心の支えとなるのである。

私はこの本を読んで、様々なことを考え、様々な感情に出会う事ができた。父親を失ったらどうだろうかと考え、いじめられていた自分と自死遺児の体験を重ねてしまい、感じた社会への不信感など、ここでは語り切れないほどだった。しかし、読み終えた後に心に残るのは爽やかな優しい気持ちだけだった。今、父親がいて母親がいて、大切な人が生きていて、私はとても幸福なのだ。この本に小さな幸せを気付かせてもらった。私もこれから、ケイコさんのように、ありのままに小さな幸せをかみしめながら、優しく強い人間になりたい。



## 『ラフカジオ・ヘルン』について

2 C 越田 高史

怪談「むじな」「みみなし芳一」で有名なラフカジオ・ヘルンを僕は、日本に興味を持って帰化した外国人くらいにしか知らなかった。

しかし、彼がいろいろな国を転々とし、その最後に日本に来て住みついたこと、記者だったこと、怪談以外に多くの作品を書いていること、教師として真剣に学生に接していたこと、日本で幸せな家庭を築いたこと、等を知り、単に怪談の作者だけではない彼の色々な面に出会えた。肉親の愛に恵まれなかった子供時代や、記者の仕事を得るまでは最低の生活を送っていたことも、ヘルンが、自分の心が望んでいる居場所を追求していく原動力になっていたのではと思う。彼は、記者時代に異文化、不思議な話、恐ろしい話に関心を示し、多くの記事を書いて読者を魅了した。題材も興味深いものだったが、何よりもヘルンは読者の目、耳、鼻、触覚など色々な感覚に訴えることによって、まるで読者もその場に居合わせたかのような気持ちにさせたのである。自分の感覚、感銘を言葉で表し、人々の心や頭の中に鮮明に再現する素晴らしさをヘルンは自分のものにしていったのである。

彼は初め『ハーパース・マンスリー』誌の特派員として来たのだが、その時日本ゆきの企画書には『私が狙うのは、読者の心に生き生きとした印象を—単に眺めているのではなく、庶民の日常生活に加わり、まるで日本の暮らし、日本人のところで考えているような印象を与えることです。』とある。この『日本人のところで』というところが、彼の最も大切にしていた点なのだと思う。来日してからの彼は、日本の様々な様子、朝の物音や、景色の色の変化等を印象記にまとめていくが、ヘルンの空気さえも再現する表現は、五感を通じて季節を楽しもうとする日本人の風習に通じるものがあると思う。彼は、日本人の中に自分と同じものを多く見出したからこそ、日本人でも気付かない日本人の心を深く見つめて描けたのだと思う。

英語教師の職を得て、松江に赴任したヘルンは生徒達を通じて日本人の見方を知る。交流の中で、沈黙があっても、それを日本人独特の礼儀正しさが好

意と解釈するヘルンには、判断に固執せず偏見を持たない前向きな姿勢を感じる。彼は人と人との触れ合いの中に無限の可能性を信じていたのだと思う。

日本人の沈黙や微笑を不可解だとする西洋に対し、日本には日本固有の道德、文化があると主張しているのだが、これは現代の国際化の中にいる僕達にとっても考えさせられる問題である。自己主張出した日本人はそれでも、和や間を大切にしたいと考えていると思う。国際化には、自分を相手に知ってもらおう粘り強い努力も必要だろうと思う。

ヘルンは、松江で身の回りの世話をしてくれた小泉セツと結婚し、幸せな家庭を築く。このセツとの出会いが、彼の人生最大の喜びであった。物語が好きなセツがヘルンに昔話や伝説を話し、それが再話物語として「雪女」や「耳なし芳一」になったことは、二人で共に創作するこれ以上ない幸せだっただろうと思う。日本語があまりうまくなかったヘルンは、セツとの会話はテニヲハを省いた独特の日本語「ヘルンさん言葉」だった。英語教師として島根県で採用が決まり、知事と取り交わした書類に事務官が「ラフカジオ・ヘルン」と表記し、ヘルンは当時ヘルンで通っていたらしい。彼女が（セツ）昔話をする時、本を見ながら話すとヘルンが「本を見るいけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません。」と言い、息を殺していかにも恐ろしそうに聞き入り、何か尋ねるにも声を低くするほどだったそうだ。明治時代に外国人と結婚したセツの勇気と、二人が仲良くお互いを理解し合おうと努力していた様子を知り、僕も人との関わりに多くの希望や可能性を確信したのである。

ワトソン著

## 『二重らせん』を読んで

1 M 小早川 弘志

僕は今まで歴代のノーベル賞受賞者だとか、後に名を残すような科学者と呼ばれる人達は、みんな頭が固くて、自分の言う事に絶対の自信を持っていて、一般の人達とは普段の生活習慣からしてどこかが違うのだらうという印象があった。いや、印象というと語弊があるだらう。印象というよりむしろ偏見と

いったほうが良いかもしれない。そんな考えをもって、今回DNAが二重らせん構造であることを発見し、ノーベル賞を授賞したワトソンの体験談のようなこの本を読んで、科学者と呼ばれる人達を、少し身近に思えることが出来た。

科学者に必要と思われることを、いくつか挙げてみるとしよう。まず、科学者だから、頭が固いとか絶対の自信に満ち溢れているといった特徴は特になく、興味のあることや、疑問に感じたことを飽きることなく最後まで、納得するまで調べ続けられるのが科学者だということがわかった。頻繁に使われている言葉だが、いつまでも子どものように、何にでも疑問を持ち続けるような人物こそ科学者だということであろう。

次に、これはワトソンだけに言える事なのかもしれないが、科学者とは、ある意味では私たち一般人よりも何とも人間臭い一面を持ち合わせているものだと感じた。同じ事について研究している人物を常に警戒し、警戒している人物が自分の発見を公に発表するとなったら、発表するまでの間に自分達も同じ物を発見し、発表すれば、前者と同様、もしくはそれ以上の名声が手に入るのではないかと考える一面など、それほど研究に没頭している証拠ともいえるのかもしれないが、なんとも人間として汚い部分であるようにも思える。

また、研究にしても、世渡りが必要だと思わせるエピソードをワトソンは多く紹介していた。優秀な人物に見込まれればそばで研究ができる、と考えれば、どのようにして近づけるのかを必死に考えたり、優秀な人物の元で研究するために病気にかかりそうな悪環境の部屋で生活したり……。僕の知っている科学者とは賞を授賞した後の、報道陣に囲まれているような場面であるため、何ともいえない華々しい世界しか見なかったように思う。もちろん、授賞の裏には多くの苦労があることは分かっていたが、苦労話と一言で済まされては、想像しようにも出来なかった。現実をちゃんとみるという意味でも、今回の本は、実に意義のある本であった。

最後に、この本には実に多くの人物が登場する。あまりにも次から次へと登場するため、誰がどのような人物であるのかが分からなくなってしまい、メモを取りながら読んでみた。するとその人物数は30

人を軽く越した。科学者だからといって、少人数による人間関係だけではなく、非常に多くの人達との間の人間関係が、大発見につなげた影響というものも、大きいと思う。

私は将来もこのような科学者になることは、おそらく無いだろうと考えているが、科学者であろうがなかろうが、後に語り継がれるほど優秀な人物には、偶然も必要なのだろう。ノーベル科学賞を授賞した白川英樹さんの、ノーベル賞受賞後のインタビューに答えた時の言葉にあったのだが、白川さんの発見は『偶然』や『たまたま』であったらしい。そう聞く、なんだかそれほど大した事ではないかのように聞こえてしまっていたが、『しかし、偶然やたまたまにも過去の蓄積があったから結果として残せた』との言葉には背筋を正される思いがした。学校での知識がちゃんと確立している状態を最低限持っている状態で、偶然を発見につなげることが出来るということは実に良い教訓となった。肝に銘じておきたい。



山崎豊子著

## 『大地の子』感想文

1 M 藤江 勇太

「国家」というものが、どれだけ人々に影響を及ぼすのか、又その「国家」の一行為がどれだけの人々の一生を変えてしまうのかということを痛感した。自分は戦争たるものを見たり聞いたりするが、実際にしたことは一度もない。

しかし、現に人間の歴史の中で幾度となく戦争が行われ、沢山の人命が奪われ、そしてそれが今も続けられているのであり、その危険はこの自分の身のまわりにまであるということを実感しなければならぬのである。そのような世の中で生きていくに当

たって、過去を振り返り、過去のあやまりをどう生かしていくのかを考え、そして実践していくことはこれからの人間にとって大変必要だと思う。

この「大地の子」には、「国家」が生む問題、大きく分ければ二つの事がらにわけることができる。

まず一つ目が戦争による犠牲である。「大地の子」には日本人でありながらも中国で沢山の人々に支えられ、たくましく生きていく主人公が描かれているが、この主人公こそが戦争による犠牲である。日本、関東軍の利己的な考えによって置き去りにされ、ソ連軍の盾にまでされた日本からの満州開拓団。その中にいた祖父、妹、そして母をも奪われた主人公は中国の夫婦に拾われながらも酷使され結局は逃げ出してしまふ。日本に捨てられ、虐殺を目の中にし、大切な人の命までをもうばわれてしまふ。その上自分は物のように扱われ、人の子らしい心まで取られてしまふ。これを犠牲と言わず何と言うか。このような事実がある以上、この事実を素通りしたり隠してはならない。少なくともこの大して何もできない自分に、書物でも何でもいいからこの人の一生の断片を人として頭に焼き付けなければならないのではないだろうか。これについて、かわいそうとか、残酷であるとか思う前に、言葉にできない暗く重いものが胸にん流れこんできた。

二つ目は民族上の人の心についてである。やはり日本人であることは、中国では日本で中国、朝鮮人がそうするように隠すべき素顔なのであった。このことは自分の周囲に今現在、在日朝鮮人の人が数多くいるからか、他人事（ひとごと）とは思えず、一番心を打ったのである。「ちがう国の血」というのがこれだけ人と人との隔たりとなるのだろうか。特に中国では日本の血を「侵略者の血」として汚い物を見るかのように見るようである。決して日本が「侵略者」であった過去を消すことはできないにしても、個人としては生きられるのではないだろうか。主人公が文革中に労改で囚人をしていたころ、そこで日本語を教えた人物の言葉「日本人として日本語を知らないことは不幸であり恥である」というのが深く心に刻まれた。民族間の隔たりはなくさなければならぬ。しかし、個人としての民族の隔たりなくしてはそれはただの一つの物体としての自分の体があるだけにすぎない。

二つの事がらは根本から言えば「国家」いや人間自身が生み出した問題である。だからそれを解決するには人間の手でなくてはならないのである。最後に、主人公には二人の父・母がいるが二人の父・母にとって主人公は互いが育てた「大地の子」であり、「大地の子」は人間の暗い心の泥から大空に向かって進んでいく光であることを願いたい。

三浦綾子著

## 『ひつじが丘』を読んで

1 C 吉本 咲香

【愛】①いつくしみ、大切に思う心。

②人、特に異性を慕う心

(三省堂『実用新国語辞典』より引用)

それでは愛とは何なのか。たった一言、そして私たちが今までに数え切れないほど見たり聞いたりして接してきた言葉でもあります。それなのにこの一つの言葉は、辞書で調べて答えが出せる程簡単なものではない思うのです。

私がこの『ひつじが丘』という本に出会ったのは、実は小学生のときでした。家の本棚に並ぶ一冊に手を伸ばし、最後まで読み切った私でしたが、やはり当時は半分も理解できていなかった気がします。そしてこの夏、読書感想文のための本を書店に探しに行った時、ふとこの本が思い出されてもう一度読みたくなったのです。

『ひつじが丘』は牧師の一人娘として育った奈緒美が、両親の反対を押し切って家出同然の結婚をし、夫の暴力や浮気に悩み苦しんでいく過程がなまなましく描かれていて、それを論ず牧師の父そして母の深い愛情がいきいきと伝わってくる本当に人間の深い部分を描いている作品です。私はこの一冊に何度もはっとさせられたり安心させられたり、そして特に牧師である奈緒美の父親の言葉にはいろいろ考えさせられました。

「愛するとはゆるすことでもあるんだよ。一度や二度ではないよ。ゆるし続けることだ。」「お前自身、幾度も幾度も人に許してもらわねばならない存在なんだよ。」人は許され続けなければならない存在であるというようなことを、言葉としてはっきりと意識したのは初めてでした。その言葉にとっても心が慰

められて、自分の人間として弱い部分も認めてよいのだとほっとしたような気がします。

けれど私は私が許されるように、誰かを許すことができるのかと考えます。ひつじが丘の中でも、奈緒美の母は以前に「私は神と結婚したのではない(中略) 過失を犯さなければ生きていけないのが人間なのだ。」そう言って牧師の夫を許していました。牧師と言っても人間、完全なものではないと言うのです。今まで私はこんなに大きな考えを持ったことはありませんでした。自分の心に照らし併せてみると、多かれ少なかれ奈緒美と同じ間違いをおかし、同じような視線で人を裁き生きてきたような気がします。それを「許しなさい」と言い、「そんなに冷たい人間だとは思わなかった」と言う牧師の父親の言葉には後ろから頭をなぐられたような気持ちがありました。愛とは許すこと、愛することの難しさを実感しました。頭ではこのことを受けとめられても、実際に心で受け止めて許すということは想像以上に難しく辛いことだと思えます。それでも自分も含

めて人間は本当に弱くて罪深い生き物だということを知り、聖書にもありますが回数に関係なく人を許す心を持てるようになりたいです。

私たちの周り、世間でも裏切りや嘘は渦を巻くほどにあるものです。そして、過失を犯してしまう不完全があるように、過失を許し切れない不完全というものもあるように思います。私自身、人間として大きくなりたいと思っても、これから経験していくであろう裏切りなどの辛さを全て許すことができると確信は正直できないのです。

それでも私はこの『ひつじが丘』で、人は「決して裏切らない」だけでなく「許し合う」ことが必要で、そうすることで愛情や絆が深まっていくものかも知れないと、私なりにおぼろげながら最初の質問の「愛とは何か」を感じ取れた気がします。

いつか私がもう一度この本を手にとった時のとらえ方は今とは違うかもしれないけれども出合えて本当に良かった一冊です。もし、愛とは何か悩んでいる人がいたらこの本を薦めてみようと思います。

## 一般利用のご案内

本校図書館は、一般の方々にも利用して頂けるよう一般開放しています。学生諸君のご家族の方々もご利用下さるようご案内いたします。理工系図書と共に教養を深める一般図書も揃っています。

## 編集後記

久しぶりのドカ雪で、県下の南半分はにっちもさっちもいなくなりました。長靴に杖まで準備して難行苦行で郡山駅に到着したけれど、雪はどこにも見あたりません。先程までの景色は、幻覚だったのだらうかと思えるほど青空が広がって…。延着した電車のおかげで遅刻したいいわけをする辛さ。みんなの顔はウッソー！とかホントー！とっています。そんな時同じ苦労をした人が一緒だと大変心強いものです。バス停で出会ったFさんは正に『地獄に仏』そのものでした。そんな番狂わせな気候もすっかり収まり、いま梅が満開です。

番狂わせといえば今年の上半期(第130回)の芥川賞、直木賞の受賞者は史上最年少ということで、注目を浴びそれぞれの受賞作が早くも、奈良高専図書館貸出ベスト・テン候補に挙がりつつあります。第28回目を数える本校の読書感想文コンクールの優秀作品もそれらの作品に劣らず力作揃いです。もしかしたら、みなさんの作品は”芥川賞もん”かも知れません。来年もたくさんの力作が集まることを期待しています。

お忙しい中、ご協力下さった皆さまありがとうございました。

(図書館委員会)